

「現代女性のライフコースと金融行動」

リコー経済社会研究所 栗林敦子

ニッセイ基礎研究所 井上智紀

少子化による人口減少や高齢化に伴う人口構造の変化、その背景としての晩婚化、非婚化、あるいは離婚・再婚の増加による家族の変容、拡大し固定化の様相を見せる経済格差の問題、またその原因でもある多様化し非正規化する雇用等々、社会の変動や家族の変容は市場の構造や消費の動向に大きな影響を与えつつある。人口減少により市場規模が縮小し、経済格差の拡大や価値観の多様化によりマス市場が解体される中で、個人が一生の間にたどる人生の道筋である「ライフコース」概念は、中長期的な消費や貯蓄といった行動を分析するセグメントとして大きな意味を持つ。

本研究は、「消費を控え貯蓄を心がける」ように変わりつつある現代女性の金融行動を、ライフコースという視点で分析し、ライフコースの中に潜む、様々な生活リスクを紐解きながら、その生活リスクへの対処手段としての金融ニーズを展望することを目的としている。

これまで、個人の金融行動は、年齢、性別、職業、ストック・フローなどのデモグラフィック変数や、ライフサイクルに基づき説明されることが多く、市場の多様化にあわせ、個人の価値観やライフスタイルといった概念をさらに導入したとしても、金融行動については説明力が不足しがちであった。フィナンシャル・プランニングを含む生活設計には、「個々人がどのように生き方を選択するか、してきたか」が深く関わっており、家族が大きく変容しつつある現在、あらためて「生き方」すなわちライフコースを視野に入れた研究が求められている。

また、ライフコースの研究は、ライフイベントの選択の系列や、人間としての役割取得のパターンに着目して個人の多様な生き方を分析することに主眼が置かれ、その適用研究は、女性のキャリアデザイン、女性の消費・購買行動などの領域では散見されるが、男女ともに金融行動への適用はまだ見られない。

ライフコースの多様化は男性より女性に顕著であり、また、家族の変容による経済生活のリスクは女性により大きな影響をもたらすと考えられる。したがって、本研究では、対象を女性に限定して進めた。

ライフコースにより、生活リスクをどのように認知しているのか、またそれらに対してどのような対応をしているのか、インターネットを利用して、全国の20代から40代にかけての女性に対してアンケートを実施した。

この結果、ライフコースの特徴からは、継続就業層と復職層で就業目的に差があることがうかがえた。また、ライフコースと生活リスクの関係は、就業継続層では就業リスク、

離職層、復職層では経済リスクをそれぞれ高く認知され、子どもあり層では子どもリスクも高いことがわかった。

ライフコースに応じた生活リスクを軽減する手段として生活設計をみると、未婚、DINKSではキャリアを見据えた自己投資や、将来の結婚・出産などのライフイベントに関する領域を中心に生活設計を検討している様子が見えられた。また、子育て中に離職層では人間関係や趣味等の生きがいに関する領域についても生活設計を検討しているようである。

ライフコース別生活リスクへの対応としての金融行動は、就業継続層では就業リスクへの備えとしてキャリア形成のための自己投資と結婚や住宅取得、老後といったライフイベントに向けた資産形成、離職層では、経済的リスクへの対処として支出の圧縮による貯蓄の積み増し、復職層では、経済的リスクへの対処として所得の増加による貯蓄の積み増しなどを行っていることが明らかになった。

ライフコース別の金融リテラシーは、就業継続層は全般に積極性、判断力とも高く、出産・子育て離職層や復職層は積極性が高いものの判断力が低く、金融取引を巡るトラブルが生じる危険性が考えられる。

金融資産の保有は、総じて不安が高いほど金融商品も分散させる傾向が見え、ただし、就業継続層では、不安の程度ではなく結婚や出産などによるライフステージの上昇に伴い資産形成も進むことで保有商品種類の多様化が進展する可能性もあるようだ。

資産保有の状況は、就業継続（既婚子あり）は金融資産、実物資産とも最も多様な資産構成であった。子育て中に退職後復職は、リスク性資産が多く、これは、資産形成に積極的ではあるが、判断力に乏しいため、トラブルが生じる危険性を孕むと考えられる。

今後、ライフコースを視野に入れた金融サービスの提供には、それぞれの経済力と金融リテラシーの双方からリスク性金融資産の許容度を考え、生活設計を含めた情報提供、コンサルティングが必要になるものと思われる。

調査研究報告書

現代女性のライフコースと金融行動

—生活経済リスクとしての非婚・晩婚・離婚に女性はどう対応するか—

2011年7月

リコー経済社会研究所 栗林敦子

ニッセイ基礎研究所 井上智紀

はじめに

少子化による人口減少や高齢化に伴う人口構造の変化、その背景としての晩婚化、非婚化、あるいは離婚・再婚の増加による家族の変容、拡大し固定化の様相を見せる経済格差の問題、またその原因でもある多様化し非正規化する雇用等々、社会の変動や家族の変容は市場の構造や消費の動向に大きな影響を与えつつある。

人口減少により市場規模が縮小し、経済格差の拡大や価値観の多様化によりマス市場が解体される中で、個人が一生の間にたどる人生の道筋である「ライフコース」概念は、中長期的な消費や貯蓄といった行動を分析するセグメントとして大きな意味を持つと思われる。

本研究は、「消費を控え貯蓄を心がける」ように変わりつつある現代女性の金融行動を、ライフコースという視点で分析し、今後の金融ニーズを展望することを目的としている。

1. 研究の概要

1. 1 研究の視点

これまで、個人の金融行動は、年齢、性別、職業、ストック・フローなどのデモグラフィック変数や、ライフサイクルに基づき説明されることが多く、市場の多様化にあわせ、個人の価値観やライフスタイルといった概念をさらに導入したとしても、金融行動については説明力が不足しがちであった。フィナンシャル・プランニングを含む生活設計には、「個々人がどのように生き方を選択するか、してきたか」が深く関わっており、家族が大きく変容しつつある現在、あらためて「生き方」すなわちライフコースを視野に入れた研究が求められている。

また、ライフコースの研究は、ライフイベントの選択の系列や、人間としての役割取得のパターンに着目して個人の多様な生き方を分析することに主眼が置かれ、その適用研究は、女性のキャリアデザイン、女性の消費・購買行動などの領域では散見されるが、男女ともに金融行動への適用はまだ見られない。

ライフコースの多様化は男性より女性に顕著であり、また、家族の変容による経済生活のリスクは女性により大きな影響をもたらすと考えられる。したがって、本研究では、対象を女性に限定して進めた。

1. 2 データ

ライフコースにより、生活リスクをどのように認知しているのか、またそれらに対してどのような対応をしているのか、インターネットを利用して次のようなアンケートを実施して情報の収集・分析を行った。

- 調査内容：就業、家族、金融等に関する意識・行動
- 調査対象：調査会社(goo リサーチ)のパネルに登録した全国の30歳～49歳の女性（学生を除く）。
- サンプルング：都道府県別に年齢階層別人口を割り付けて調査を依頼し、計画した有効回答数が確保できるまで調査を継続。
- 調査期間：2011年2月25日～2011年2月28日
- 有効回答数：1063

<回答者概要>

	実数	%
全体	1063	100.0
20～29歳	215	20.2
30～39歳	472	44.4
40～49歳	376	35.4

- 調査方法：web 調査
- 調査機関：NTT レゾナント株式会社

2. 研究結果

2. 1 女性のライフコースとその要因

(1) 女性のライフコース

ライフコースとは、個人が生まれてから死ぬまでの間にたどる人生の道筋のことを指す。人は一生のうちに、就学、就職、転勤、結婚、出産など、さまざまな出来事、すなわちライフイベントに遭遇するが、過去にどのようなライフイベントを経験し、その時どのような選択をしたか、その選択の組み合わせの仕方によってライフコースが分類される。

多くの人にとって生活の中で、家庭と職業のバランスをとり双方ともに充実させていくことは、大きな課題であるが、女性は、男性に比べ、出産や育児による生活の制約が多いため、学校を卒業したあと、就業、結婚、出産、育児などの様々な選択—すなわちライフコースの選択は、より大きな課題となっている。

近年、女性の意識や生活行動がライフコースによって大きな違いがあることが様々な調査研究より明らかになっている。特に、消費者行動の分析においては、生活者視点に立って、より具体的な生活シーンを描き出せる手法として注目されている。

そこで、女性のライフコースを、就職・退職・再就職(復職)の観点と、結婚、出産経験の有無から整理してみると、次表のようになる。

	ライフコースの類型	本研究での表現
●継続就業型 結婚しないで働き続けている ／結婚や出産をしても仕事を やめないで働き続けている	卒業 → 就職	継続就業（未婚子なし）
	卒業 → 就職 → 結婚	継続就業（既婚子なし）
	卒業 → 就職 → 結婚 → 出産	継続就業（既婚子あり）
●離職型 結婚や出産を期に仕事を辞 め、その後は働いていない	卒業 → 就職 → 結婚退職	結婚契機で離職
	卒業 → 就職 → 結婚退職 → 出産	出産契機で離職
	卒業 → 就職 → 結婚 → 出産退職	出産契機で離職
	卒業 → 就職 → 結婚 → 出産 → 退職	子育て中に離職
●再就職（復職）型 結婚や出産を期に仕事を辞 め、その後再び働いている	卒業 → 就職 → 結婚退職 → 再就職	結婚契機で退職後復職
	卒業 → 就職 → 結婚退職 → 出産 → 再就職	出産契機で退職後復職
	卒業 → 就職 → 結婚 → 出産退職 → 再就職	出産契機で退職後復職
	卒業 → 就職 → 結婚 → 出産 → 退職 → 再就職	子育て中に退職後復職
●就業経験なし	卒業	就業経験なし
	卒業 → 結婚	
	卒業 → 結婚 → 出産	
●その他		その他

平成18年版「国民生活白書」では、独身女性の理想とするライフコースとして1992年には35%と最も多かった「離職層」が年々減少し2002年には20%に至り、同じ10年で「復職層」が32%から39%に、「継続就業層」が21%から30%に増加していることが示されている。この理想は必ずしも実現している訳ではないと思われるが、専業主婦志向の女性が減少している傾向がある。

また、学習院大学の女性ライフコース研究では、同じ女性の調査対象者を2005年から2009年までに5回継続して調査を行うパネル調査を実施している。初回調査の継続就業未婚層の67%はライフコース類型に変化がなく、結婚・出産に向かわない働く未婚女性が多いことが明らかになっている。また、初回調査で、学校卒業後就職をしてその後退職し、当時働いていない層の56%はライフコース類型に変化はなかったが、44%が再就職（復職）していることがわかった。したがって、未婚層はライフコース類型が比較的固定的であるが、既婚離職層は復職層へとライフコース類型がシフトしている様子が明らかになっている。

②ライフコースの特徴

今回の調査でも、ライフコースを、就業経験、就業の状況（継続、離職、退職後復職）と就業を継続している人に対しては婚姻状況、子どもの有無、離職、退職後復職した人に対しては離職のタイミングを用いて更に分類し、計11の分類として分析を進めた。分類ごとの構成比をみると、継続就業層の割合は、前述の国民生活白書に示されていた独身女性の理想を大きく超え、復職層は大きく下回っている。

以下に、本調査における各ライフコース類型の特徴をまとめる（図表1）。

年代で見ると、就業経験がない層や未婚で仕事を継続している層は平均年齢が30歳代前半と若く、20歳代後半が最も多い。一方、一度退職して復職した層は平均年齢も40歳代前半と高く、分布も40歳代が最も多い。結婚や既婚で就業を継続している層、あるいは離職した層は平均年齢が30歳代後半で、30歳代後半から40歳代後半にかけて分布し、未婚層や復職層の中間の年代にあたる人が多い。離職層が復職層より年代が低いということからは、離職層には今後復職を考える層も含まれる可能性が示唆される。

学歴では、大学・大学院卒の割合は、未婚と既婚で子どものいない継続就業層で4割以上と高く、復職層で3割以下と低くなっている。個人年収が300万円以上の割合は継続就業層で3割以上と相対的にみて高く、世帯年収700万円以上は既婚で継続就業の層で3割を超え、結婚を期に退職した層、子育て中に退職して復職した層も25%を超えている。

図表1 ライフコース類型の特徴

		n=	構成比	年代						平均年齢 (歳)
				20~24 歳	25~29 歳	30~34 歳	35~39 歳	40~44 歳	45~49 歳	
継続	継続就業（未婚子なし）	256	24.1%	2.8%	5.8%	4.6%	4.6%	4.2%	2.0%	33.6
	継続就業（既婚子なし）	113	10.6%	0.3%	1.5%	3.2%	2.9%	1.7%	1.0%	35.6
	継続就業（既婚子あり）	93	8.7%	0.1%	0.7%	2.3%	3.0%	1.9%	0.8%	36.8
離職	結婚契機で離職	205	19.3%	0.3%	3.1%	4.4%	4.6%	3.8%	3.1%	36.7
	出産契機で離職	154	14.5%	0.3%	2.4%	3.4%	3.9%	2.9%	1.7%	36.1
	子育て中に離職	29	2.7%	0.0%	0.0%	0.6%	0.5%	1.3%	0.4%	39.4
復職	結婚契機で退職後復職	41	3.9%	0.0%	0.1%	0.6%	0.5%	1.5%	1.2%	41.5
	出産契機で退職後復職	54	5.1%	0.0%	0.5%	0.5%	0.6%	1.6%	2.0%	41.1
	子育て中に退職後復職	35	3.3%	0.0%	0.2%	0.4%	1.0%	0.8%	0.9%	40.3
就業経験なし		25	2.4%	0.3%	1.0%	0.5%	0.4%	0.0%	0.2%	30.9
その他		58	5.5%	0.3%	0.7%	1.0%	1.1%	1.6%	0.8%	37.0
全体		1,063	100.0%	4.3%	15.9%	21.4%	23.0%	21.3%	14.1%	36.2

		n=	大学・大学 院卒の割合	個人年収 300万円以 上	世帯年収 700万円以 上割合
継続	継続就業（未婚子なし）	256	46.9%	36.7%	21.1%
	継続就業（既婚子なし）	113	46.9%	35.4%	30.1%
	継続就業（既婚子あり）	93	31.2%	31.2%	36.9%
離職	結婚契機で離職	205	38.0%	3.9%	25.8%
	出産契機で離職	154	33.8%	3.9%	13.7%
	子育て中に離職	29	20.7%	3.4%	18.5%
復職	結婚契機で退職後復職	41	17.1%	7.3%	16.2%
	出産契機で退職後復職	54	27.8%	5.6%	14.0%
	子育て中に退職後復職	35	22.9%	14.3%	26.7%
就業経験なし		25	28.0%	0.0%	15.0%
その他		58	29.3%	13.8%	18.8%
全体		1,063	36.9%	18.5%	22.6%

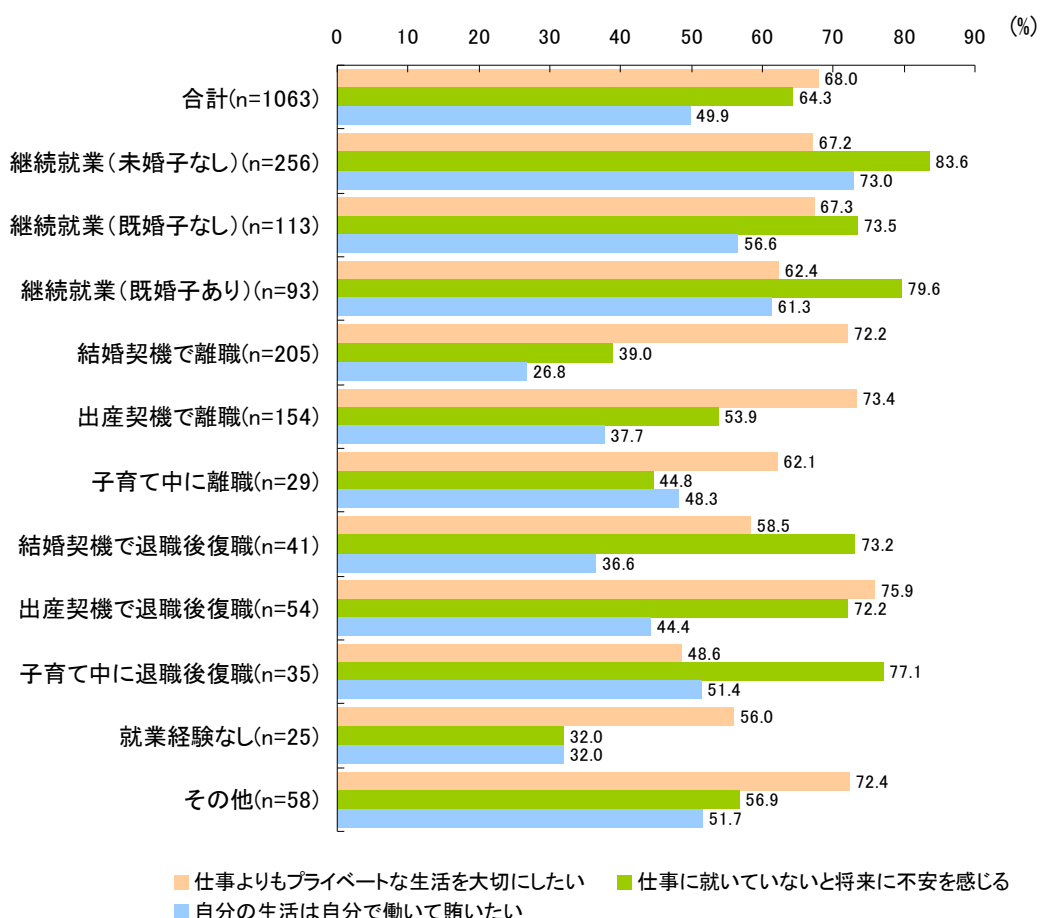
(2) 女性のライフコースの要因

ライフコースを選択する要因としては、仕事や家庭生活についての考え方・価値観があると考えられる。

図表2で、仕事と家庭に関する考え方をみると、全体では「仕事よりプライベートな生活を優先」が約7割、「仕事に就いていないと将来に不安」が約6割、「自分の生活は自分で働いて賄う」が約5割と、概して「プライベートな生活は優先したいが、働かないことは不安である」という様子が見えてくる。これをライフコース別にみると、就業継続層や復職層は「仕事に就いていないと将来に不安」という意識が強く、「自分の生活は自分で働いて賄う」という意識は就業継続層に強い。「仕事よりプライベートな生活を優先」という意識は、結婚や出産で離職した層と出産で退職し復職した層がやや強いものの、就業継続層と大きな違いはない。

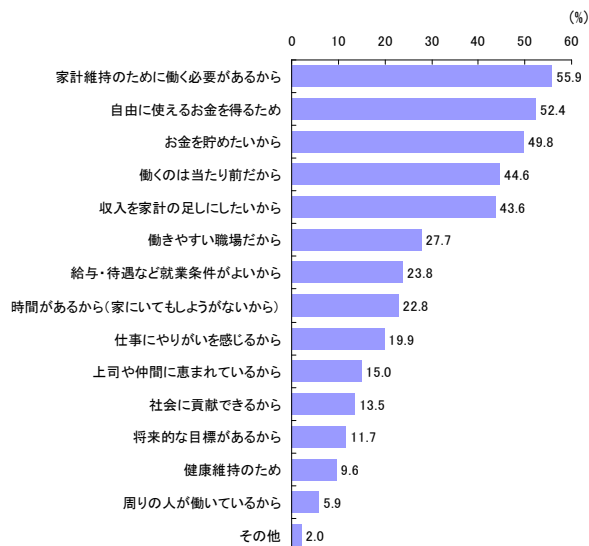
これらより、就業継続層は自立のための仕事をプライベートな生活と両立させようという意識が強く、離職層は将来にあまり不安を考えずプライベートを重視しようという意識があり、復職層はプライベートを重視しつつ将来のために仕事をしようという意識が強いことが示唆される。

図表2 ライフコース別仕事と生活についての考え方

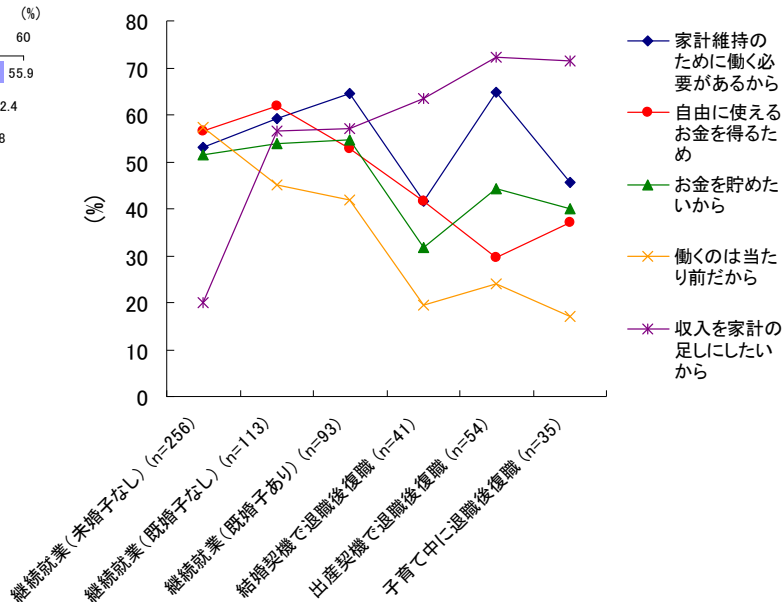


次に、現在働いている人の就業目的をみると、全体では、「家計維持」「自由に使えるお金を得る」「貯金」「働くのは当たり前」「家計補助」の順に多いが（図表3）、ライフコース別にみると（図表4）、「働くのは当たり前」の割合は未婚層が6割弱と最も高く、既婚の継続就業層が約4割、復職層は2割前後となっており、ここからもライフコースにより就業観が大きく異なることがうかがえる。また、「自由に使えるお金を得る」も同様の傾向を示している。一方、「家計補助」は復職層全体での割合が高い。「家計維持」や「貯蓄」目的の就業の割合は、継続就業層、出産退職後の復職層で高いが、結婚が契機に退職して復職した層は低くなっている。

図表3 就業目的（複数回答）
（全体、n=592）



図表4 ライフコース別就業目的
（複数回答、ただし上位5項目）



2. 2 ライフコース別生活リスクの把握

では、女性はライフコースによって認知するリスクにどのような違いがあるのだろうか。

図表5に、様々な生活リスクを「不安である」から「不安ではない」までの5段階尺度で尋ねた結果を示す。

全体では、「所得の減少・伸び悩み」「日常生活費の不足」「生活習慣病の罹患」「老後生活費の不足」「病気・ケガなどによる障害」が上位5位まででいずれも7割以上となっている。続く項目をみても、家庭経済や健康に関する不安が高いことがうかがえる。

これをライフコース別に比較すると、結婚や出産で退職し復職した層は多くの項目において相対的に不安を持つ割合が高い。未婚層は健康に関する不安が相対的に低く、仕事や子供をもてないことなどへの不安を持つものが多い。また、子どもを持つ層は就業の状況にかかわらず教育費の負担を不安に思っているようである。

図表5 ライフコース別生活リスクの認知状況（「不安である」と「やや不安である」の計）

	所得が減少する、もしくは伸び悩む	日常生活費が不足する	がん・心疾患・脳血管疾患など重度の生活習慣病にかかる	十分な老後生活費が確保できない	病気・ケガによって障害がこる	長期の入院・通院を要する病気に罹る	税・社会保障料負担が増加し、可処分所得が減少する	十分な医療・介護サービスが受けられない	子どもの教育費が負担になる	過労で心身の健康を損なう
継続就業(未婚子なし)	72.3%	71.5%	65.6%	68.8%	65.6%	64.8%	61.3%	62.1%	38.7%	60.2%
継続就業(既婚子なし)	71.7%	71.7%	74.3%	69.9%	71.7%	66.4%	66.4%	64.6%	38.9%	53.1%
継続就業(既婚子あり)	69.9%	64.5%	71.0%	68.8%	68.8%	65.6%	62.4%	63.4%	67.7%	52.7%
結婚契機で離職	69.8%	72.2%	76.1%	71.2%	73.2%	72.2%	64.4%	63.4%	63.4%	58.5%
出産契機で離職	74.0%	71.4%	70.8%	72.1%	70.1%	70.1%	70.8%	64.9%	73.4%	54.5%
子育て中に離職	75.9%	79.3%	82.8%	72.4%	82.8%	79.3%	69.0%	72.4%	79.3%	55.2%
結婚契機で退職後復職	82.9%	85.4%	75.6%	75.6%	78.0%	75.6%	70.7%	70.7%	78.0%	63.4%
出産契機で退職後復職	88.9%	83.3%	75.9%	75.9%	70.4%	72.2%	63.0%	59.3%	77.8%	61.1%
子育て中に退職後復職	68.6%	74.3%	77.1%	74.3%	77.1%	71.4%	68.6%	74.3%	77.1%	60.0%
就業経験なし	76.0%	88.0%	84.0%	80.0%	92.0%	88.0%	64.0%	76.0%	64.0%	72.0%
その他	69.0%	67.2%	69.0%	72.4%	69.0%	70.7%	63.8%	55.2%	43.1%	44.8%
全体	72.9%	72.6%	72.2%	71.2%	71.0%	69.5%	65.0%	64.0%	57.8%	57.1%

	家族を遺して死亡する	思いうような住宅に住み続けられない	条件の合う就職・転職先が見つからない	友人や知人など頼れる人がいなくなり孤独になる	失業する	家族との関係が悪くなる	債務(ローン)返済が負担になる	子育てがうまくいかない	子どもを持たない	投資に失敗し、資産が減少する
継続就業(未婚子なし)	34.8%	51.2%	62.1%	55.5%	64.1%	40.2%	39.1%	43.0%	50.8%	34.8%
継続就業(既婚子なし)	49.6%	49.6%	48.7%	46.0%	52.2%	49.6%	39.8%	35.4%	50.4%	27.4%
継続就業(既婚子あり)	58.1%	49.5%	41.9%	49.5%	54.8%	44.1%	52.7%	48.4%	28.0%	35.5%
結婚契機で離職	57.1%	52.7%	41.5%	46.8%	34.6%	49.3%	43.4%	42.9%	31.2%	29.3%
出産契機で離職	60.4%	52.6%	53.9%	51.3%	39.6%	50.0%	57.8%	48.1%	20.1%	31.8%
子育て中に離職	69.0%	48.3%	41.4%	48.3%	44.8%	44.8%	55.2%	34.5%	24.1%	37.9%
結婚契機で退職後復職	63.4%	53.7%	46.3%	41.5%	51.2%	58.5%	61.0%	41.5%	26.8%	34.1%
出産契機で退職後復職	55.6%	51.9%	50.0%	44.4%	53.7%	51.9%	44.4%	44.4%	18.5%	25.9%
子育て中に退職後復職	62.9%	57.1%	54.3%	40.0%	62.9%	54.3%	51.4%	48.6%	37.1%	34.3%
就業経験なし	60.0%	72.0%	48.0%	76.0%	48.0%	64.0%	60.0%	64.0%	48.0%	56.0%
その他	58.6%	39.7%	43.1%	44.8%	43.1%	46.6%	32.8%	31.0%	31.0%	27.6%
全体	52.3%	51.5%	50.3%	49.8%	49.7%	47.5%	46.0%	43.2%	35.7%	32.3%

この設問への回答結果に対して因子分析（主因子法）を適用したところ、図表6に示すように、健康リスク因子、経済リスク因子、子どもリスク因子、就業リスク因子の4つの生活リスク因子が抽出された。

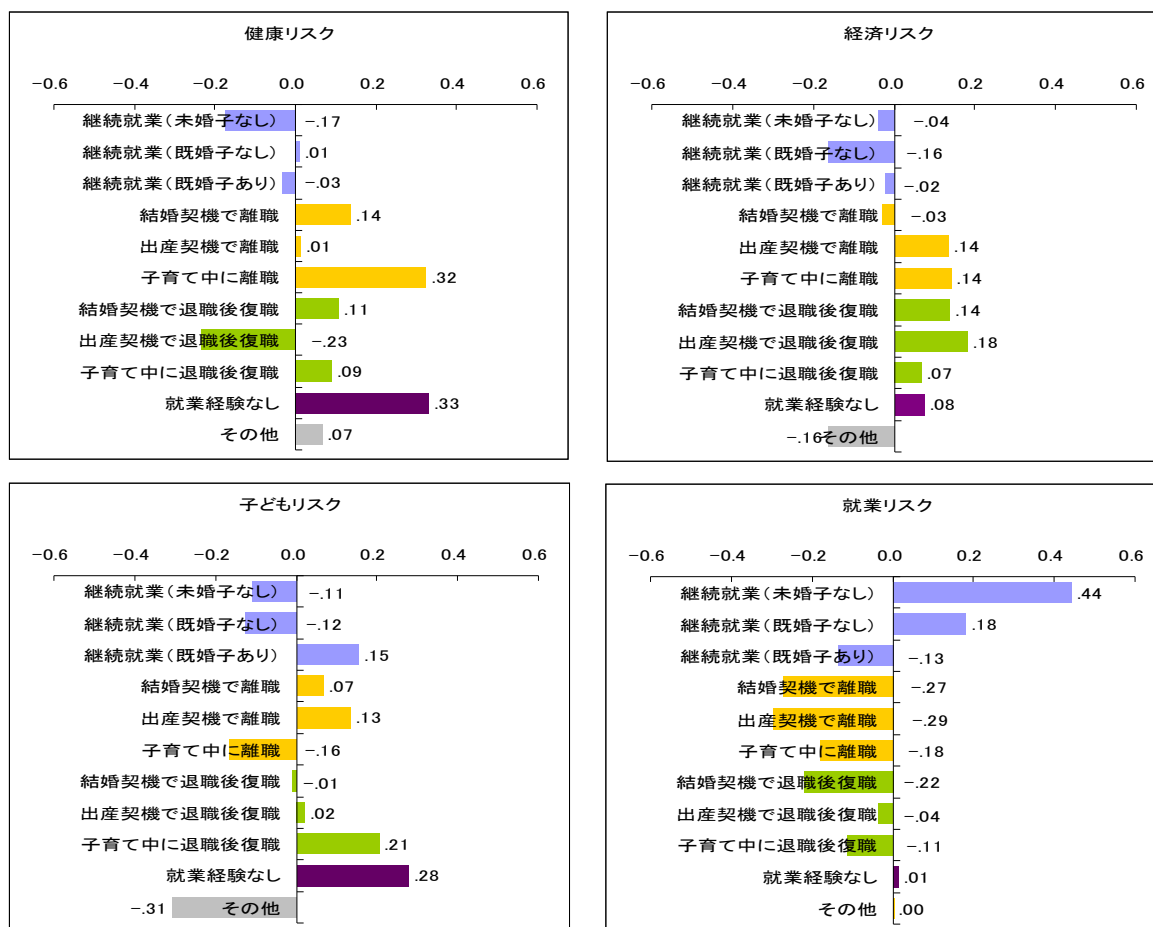
「健康リスク因子」は、病気やケガで障害がのこる、長く入院・通院を要する病気にかかる、重度の生活習慣病にかかるなど、健康や医療についての不安を中心とした因子である。「経済リスク因子」は、老後あるいは日常の生活費が不足する、所得が減少したり伸び悩むなど、家庭の経済に関わる不安を中心とした因子である。「子どもリスク因子」は、子どもを持つ、育てる、教育するといった子どもに関わる不安を中心とした因子である。「就業リスク因子」は、失業や転職といった仕事に関わる不安を中心とした因子である。

図表6 生活リスク因子の抽出

	因子			
	医療・障害リスク因子	家計・所得リスク因子	教育・子育てリスク因子	就職・失業リスク因子
病気・ケガによって障害がのこる	.851	.314	.090	.152
長期の入院・通院を要する病気にかかったりケガをする	.849	.255	.106	.157
がん・心疾患・脳血管疾患など重度の生活習慣病にかかる	.847	.312	.102	.121
十分な医療・介護サービスが受けられない	.648	.437	.128	.215
家族を遺して死亡する	.616	.165	.397	.020
友人や知人など頼れる人がいなくなり孤独になる	.407	.297	.346	.284
十分な老後生活費が確保できない	.317	.746	.116	.239
税・社会保険料負担が増加し、可処分所得が減少する	.321	.715	.126	.172
所得が減少する、もしくは伸び悩む	.228	.712	.110	.231
日常的な生活費が不足する	.404	.658	.108	.268
債務（ローン）返済が負担になる	.232	.543	.357	.106
子どもの教育費が負担になる	.129	.540	.499	-.037
思うような住宅に住み続けられない	.272	.535	.324	.198
子育てがうまくいかない	.045	.189	.665	.197
家族との関係が悪くなる	.428	.230	.480	.299
子どもを持たない	.071	-.009	.449	.308
投資に失敗し、資産が減少する	.277	.233	.441	.208
失業する	.180	.254	.220	.798
条件の合う就職・転職先が見つからない	.081	.306	.282	.571
過労で心身の健康を損なう	.409	.222	.316	.524
固有値	9.301	1.796	1.411	1.079
累積寄与率	20.823	39.810	50.578	60.365

これらの生活リスク因子をライフコース別にみると（図表7）、就業リスクは未婚と既婚子どもなしの就業継続層のみが強く、それ以外のリスクはいずれも、離職層や復職層で強く認知される傾向がある。また、経済リスクに注目すると、離職層、復職層の6類型の中で結婚契機で離職した層のみが認知度合いが低くなっている。

図表7 ライフコース別生活リスク因子スコア



2. 3 生活リスク（ライフコース・リスク）低減のための生活資源の充足状況

人々は、不確実な未来に対して、「不安」という感情を抱き、生活リスクを認知しているが、ライフコースの選択に伴うリスクであれば、生き方をあらかじめよく考えておき、途中で遭遇するかもしれないリスクを想定し、その対応法について準備しておくことで、リスク全体を軽減することができると考えられる。

ライフコース選択に伴うリスクを低減するために活用しうる個人レベルの生活資源は、

- ①リスク低減の意欲・意思（生活設計意識や人生の計画性）
- ②リスク対応のための能力（学歴、資格など）
- ③リスク対応の機会（ネットワーク、人脈）
- ④リスク情報（情報取得、情報へのアクセス能力、知識）、
- ⑤リスク対応資金（収入、貯蓄）

などがあると考えられる。

ここでは、①から③について、ライフコース別にそれらの資源がどの程度充足されているかをみる。④、⑤については、2. 4において、金融意識・行動との関連でまとめる。

（1）生活リスク低減の意欲・意思

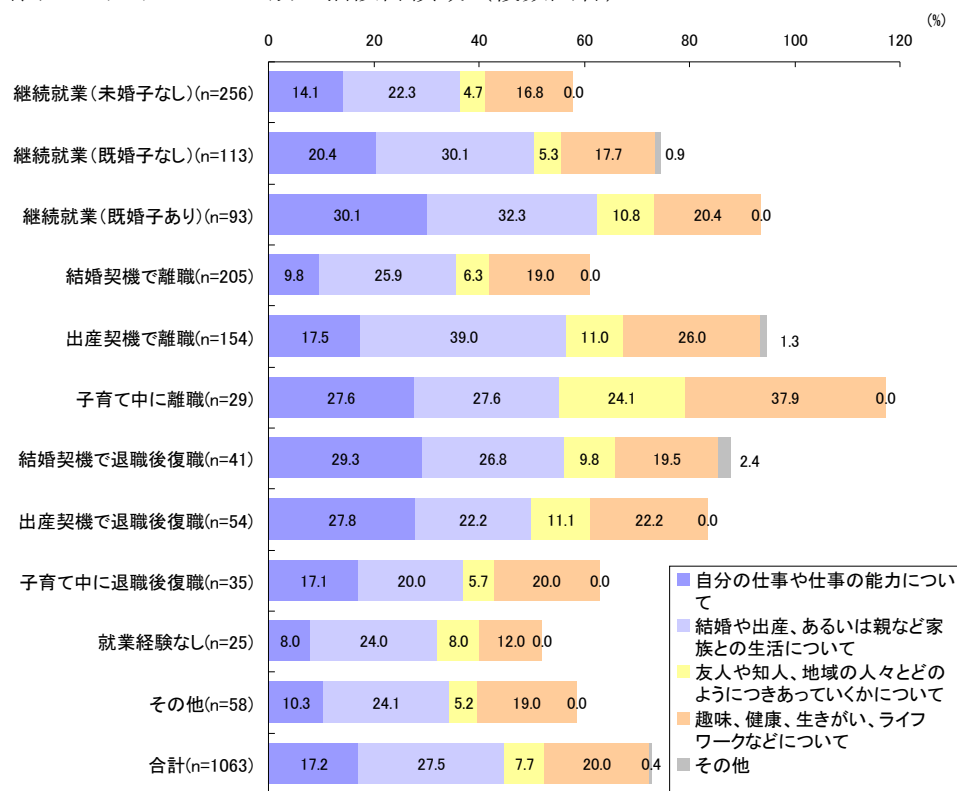
「何歳までに何をやる」といったように、具体的に生活設計をたてているものを聞いた結果を図表8に示す。

全体では、「結婚や出産、あるいは親など家族との生活」をあげたものが3割弱、「趣味、健康、生きがい、ライフワークなど」は約2割となっており、「仕事やその能力」が2割弱、「人々とのつきあい」が1割弱である。

ライフコース別にみると、出産契機で離職した層が「結婚や出産、あるいは親など家族との生活」、出産契機や子育て中に離職した層が「趣味、健康、生きがい、ライフワークなど」、既婚で子どものいる継続就業層、子育て中に離職した層、結婚・出産契機で退職し復職した層は、「仕事やその能力」などの領域での生活設計をする傾向が多いなどの特徴がある。

次に、生活設計の実現に向けて何か行っているかを尋ねたところ、どのライフコースでも約8割の人が「行っていることがある」と回答しており、ライフコースによる差はみられない(図表略)。その内容は、どのライフコースにおいても貯蓄が主であり、未婚層はキャリアや結婚を考えた自己投資を、現在の離職層も復職のための資格取得などを行っていることが特徴となっている(図表略)。貯蓄内容の詳細は後述する。

図表 8 ライフコース別生活設計領域（複数回答）



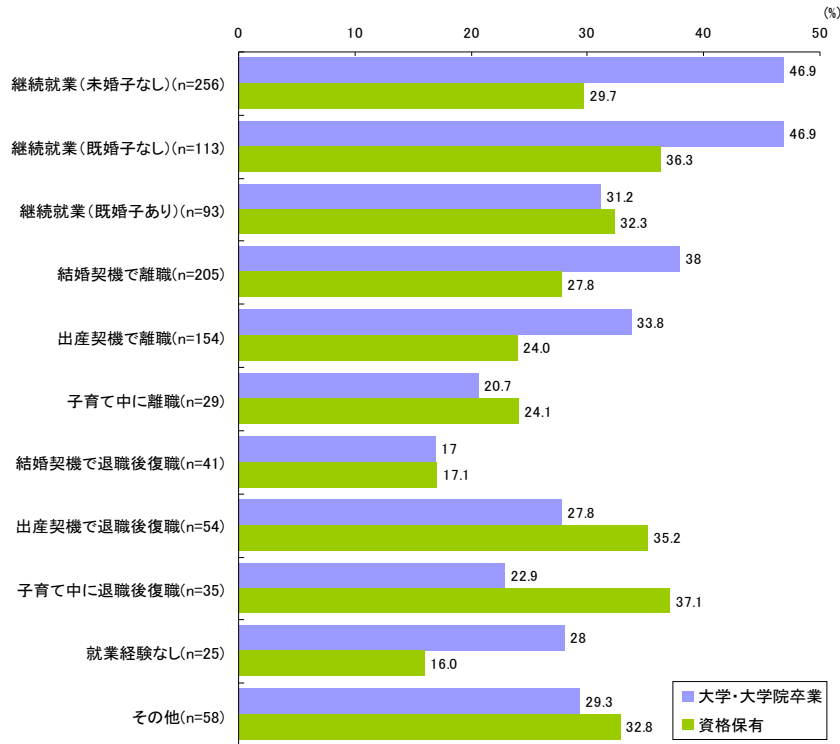
(2) リスク対応のための能力・資格

リスク対応のための能力として学歴と資格をとりあげる。大学・大学院卒業の割合と、いざというときの収入につながる資格の有無を図表 9 に示す。

学歴では、大学・大学院卒の割合は、未婚と既婚で子どものいない継続就業層で 4 割以上と高く、復職層で 3 割以下と低くなっている。資格の保有率は、継続就業層や復職層で高く、中でも子どものいない継続就業層、出産や子育てで退職し復職した層が目立つ。資格の保有率が最も低いのは結婚を契機に退職後復職した層で出産契機の離職層、子育て中の離職層も低い。

保有する資格について、自由回答欄に記入してもらったものをライフコース別にまとめて示す（図表 10）。未婚や子どものいない継続就業層には専門的高等教育が必要な資格や語学が目立ち、離職層や復職層では茶道・華道・音楽など趣味の師範、ホームヘルパーなどの介護系が目立つ。

図表 9 学歴と資格



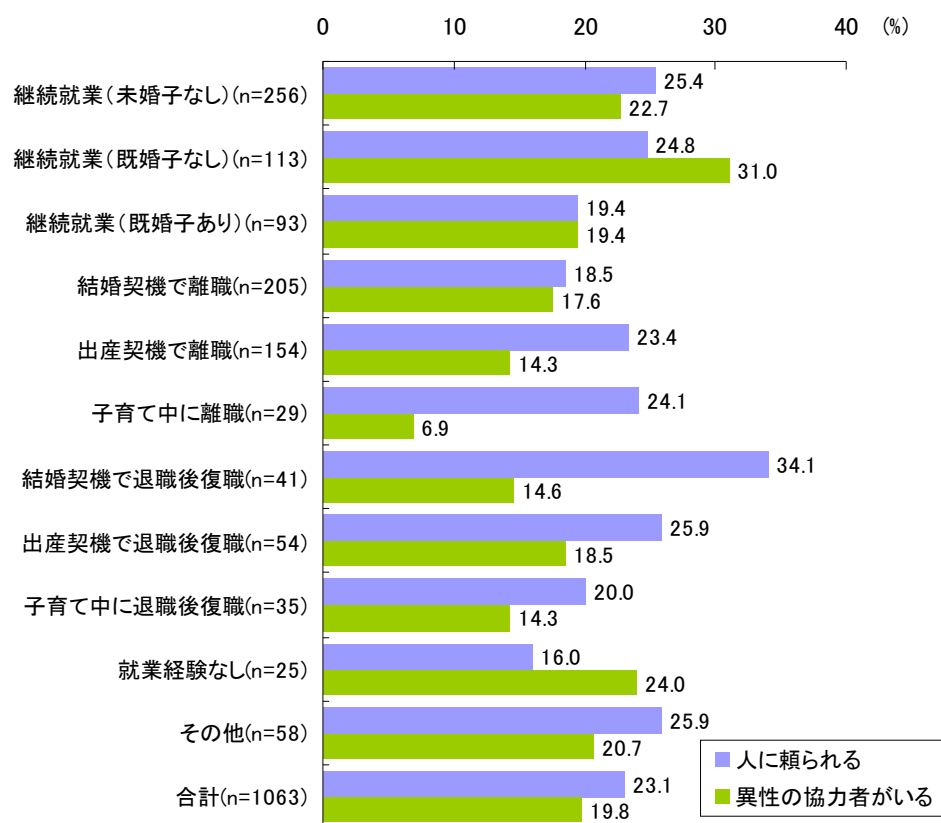
図表 10 いざというときの仕事や収入につながる資格の種類 (自由回答)

ライフコース類型	資格種類例
継続就業(未婚子なし)	語学、理学療法士、医師、薬剤師、臨床検査技師、看護師、機能訓練士、歯科衛生士、教員、簿記、秘書、医療事務、社労士、FP
継続就業(既婚子なし)	語学、証券外務員、ケアマネジャー、歯科衛生士、ソフトウェア開発者、医療事務、書道師範、フラワーアレンジメント、看護師、公認会計士、作業療法士、司書、歯科医師、歯科衛生士、歯科助手、簿記、秘書、シスアド、学芸員、損保募集人、宅建、ピアノ、美容師、保育士、薬剤師、教員
継続就業(既婚子あり)	語学、音楽、看護師、臨床心理士、ホームヘルパー、建築士、行政書士、FP、社会福祉士、宅建、美容師、保育士、茶道師範、情報処理技術者、保険募集人、簿記、秘書、理学療法士
結婚契機で離職	語学、簿記、カラーコーディネーター、キャリアコンサルタント、情報処理技術者、FP、ベジタブルフルーツマイスター、ヘルパー、医療事務、秘書、介護福祉士、看護師、管理栄養士、教員免許、簿記、証券外務員、簿記、保育士、美容師、調理師、不動産鑑定士、測量士
出産契機で離職	語学、ピアノ、フラワーデザイン、ヘルパー、教員、測量士補、社会福祉主事、医療事務、電卓検定、秘書、介護福祉士、保険外務員、看護師、管理栄養士、歯科医師、図書館司書、宅建、美容師、簿記、保育士
子育て中に離職	バレエ、ピアノ、教員、介護士、歯科衛生士、図書館司書、簿記
結婚契機で退職後復職	ホームヘルパー、教員、歯科衛生士、助産士、看護師、簿記、保育士
出産契機で退職後復職	インテリアコーディネーター、ソムリエ、調理師、ヘルパー、医療事務、看護師、管理栄養士、教員、華道、宅建、美容師、医療事務、保育士、図書館司書
子育て中に退職後復職	ケアマネ、ネイリスト、医療事務、看護師、歯科衛生士、損保募集人、情報処理技術者、図書館司書、宅建、簿記

(3) リスク対応の機会（ネットワーク、人脈）

さらに、ネットワーク、人脈をみると「友達・仲間が多い」は既婚で子どものいる継続就業層、出産契機で退職後の復職層で高い。おそらく、子ども関係のつながりが多いためであると考えられる。「人に頼られる」は結婚契機で退職後の復職層が突出している。また「異性の協力者がいる」は既婚で子どものいない継続就業層が突出している。

図表 1 1 ネットワーク力



2. 4 生活リスクへの対応としての金融行動の現状とそのニーズ

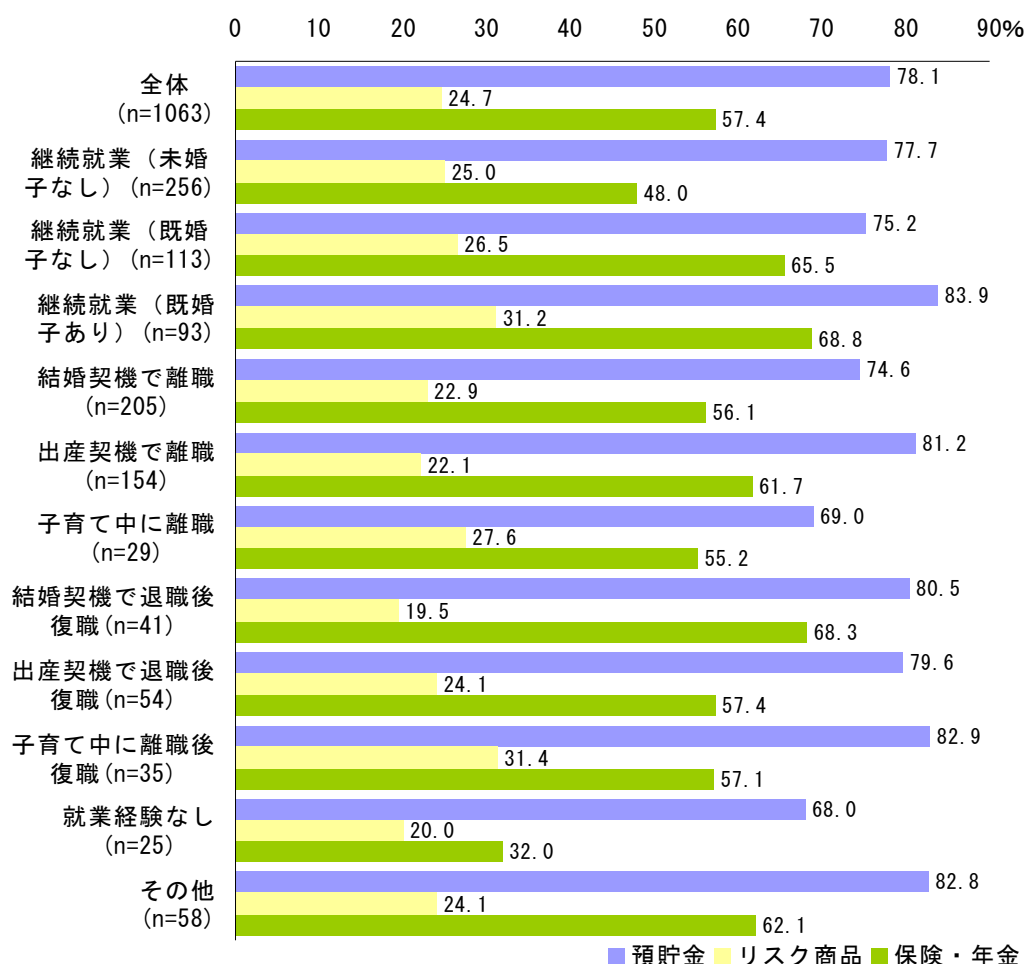
(1) 金融行動の現状

①保有している金融商品

保有している金融商品の種類をみると、全体では「預貯金」¹が 78.1%で最も多く、「保険・年金」² (57.4%)、「リスク商品」³ (24.7%) の順となっている (図表 1 2)。

ライフコース別にみると、「預貯金」は、子育て中に離職した層と就業経験なし層で全体に比べ低くなっている。また、「リスク商品」は、継続就業 (既婚子あり) と子育て中に退職後復職層で高く、結婚契機で退職後復職層で低くなっている。「保険・年金」は、既婚の継続就業層、結婚契機で退職後復職した層で高く、未婚の継続就業層、就業経験なし層で低くなっている。

図表 1 2 保有している金融商品 (ライフコース別)



1 「預貯金」：定期預金、定期貯金、定額預金

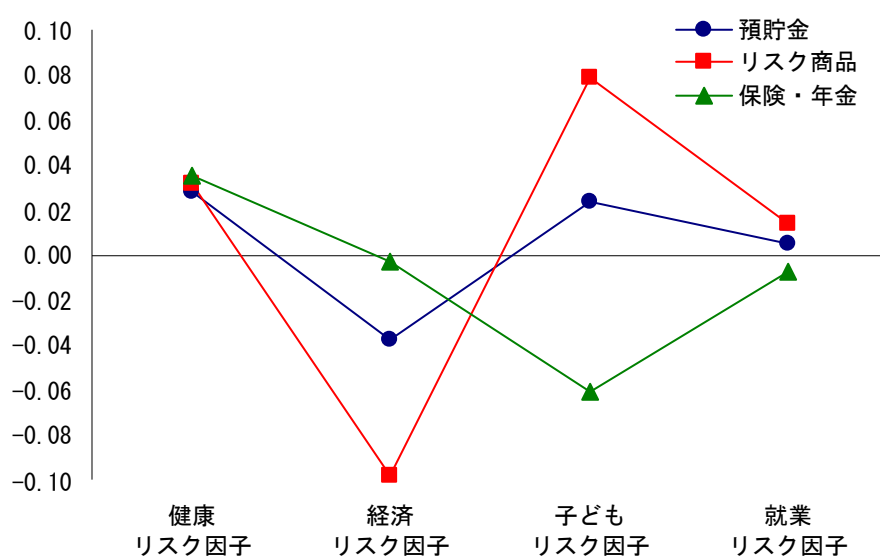
2 「保険・年金」：生命保険、医療保険・ガン保険、個人年保険

3 「リスク性商品」：外貨預金、株式、投資信託、F X

②保有している金融商品と生活リスクの関係

保有している金融商品の種類別に4つの生活リスクとの関係を見ると、預貯金の保有層およびリスク商品の保有層では「子どもリスク」が高く、「経済リスク」が低くなっている。リスク商品の保有層は、「経済リスク」が最も低く、「子どもリスク」が最も高い。一方、保険・年金の保有層では「子どもリスク」が低くなっている（図表13）。

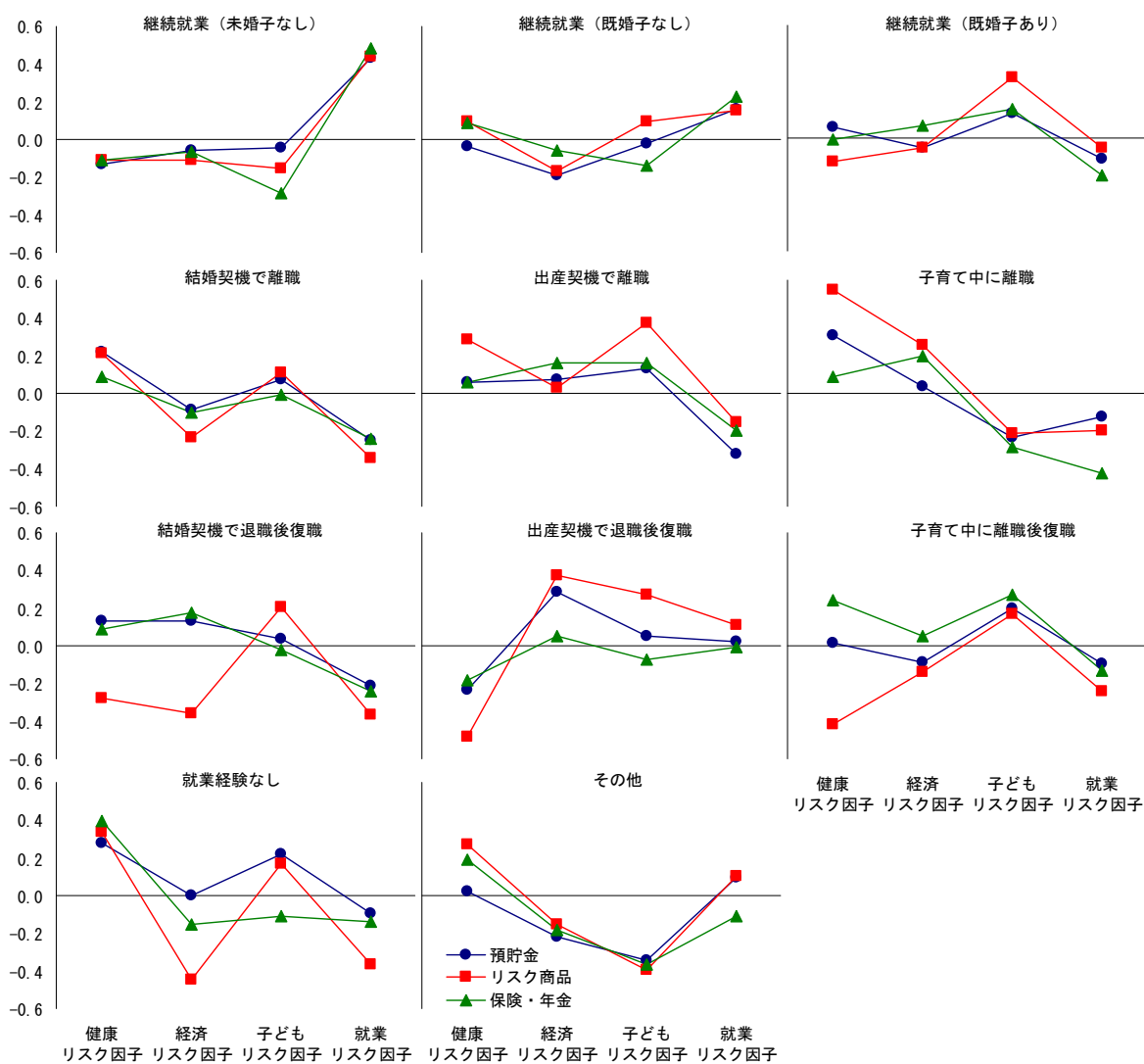
図表13 金融商品保有と生活リスク



これをライフコース別にみたものを図表14に示す。

リスクの認知量は、総じて保有している金融商品の種類よりもライフコースによる影響が大きいようであるが、リスク商品の保有者のうち、復職層では「健康リスク」が低い。同様に、リスク商品の保有者のうち結婚契機で退職後復職層、就業経験なし層では、「経済リスク」も低くなっている。

図表14 金融商品保有と生活リスク（ライフコース別）

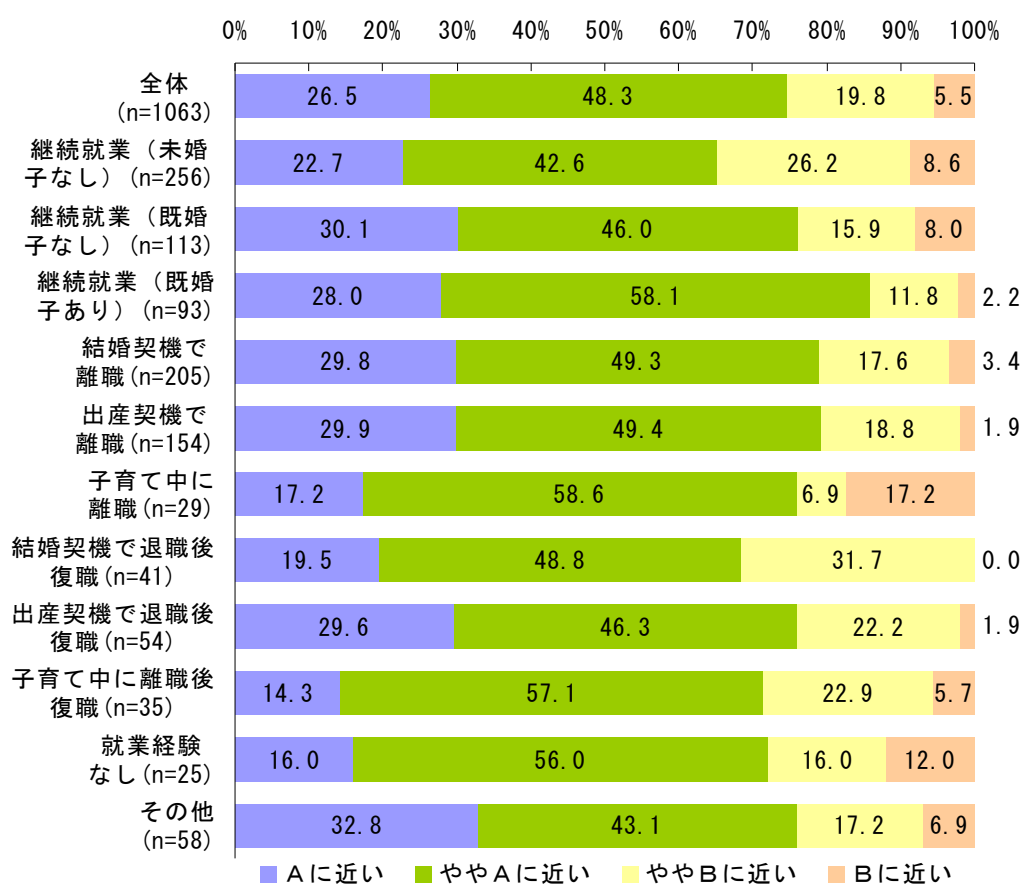


(2) 貯蓄・消費意識

将来に備えて、貯蓄をするタイプ（A：以下、「貯蓄派」）か、将来に備えるよりも今をエンジョイするタイプ（B：以下、「消費派」）かを尋ねた結果をみると、全体では「貯蓄派」が74.8%で「消費派」（25.2%）を大幅に上回っている（図表15）。

ライフコース別にみると、未婚の継続就業層では「消費派」が34.8%と全体に比べ10ポイント近く高くなっている。一方、子どもがいる既婚の継続就業層では「貯蓄派」が86.0%と全体に比べ10ポイント以上高くなっている。

図表15 貯蓄か消費か



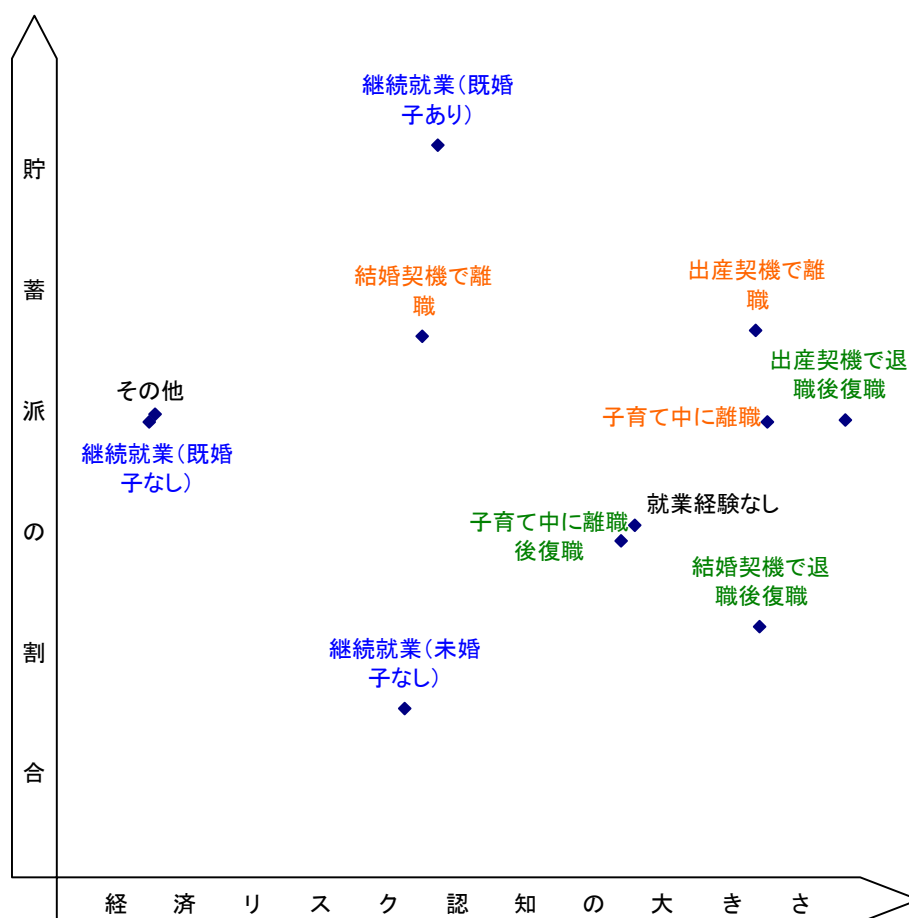
「貯蓄派」の割合と経済リスクについて、ライフコース別にプロットした図を図表16に示す。

継続就業層では、経済リスクの認知は結婚や子どもを持つことを契機にして上昇するが、貯蓄派の割合は一貫して上昇している。

結婚を期に離職した層と結婚を期に退職し復職した層を比べると、復職層のほうがリスク認知が高く、離職層のほうが貯蓄派の割合が高い。教育費負担などの支出により貯蓄余力が下がったり日常の消費が活発だったりする分、家計へのリスク認知が高まり、復職を選択したものと思われる。出産を期に離職した層と出産を期に退職し復職した層とを比較しても同様である。

子育て中に離職した層では、復職によりリスク認知・貯蓄派の割合ともに下がっている。この層では、復職による収入の獲得がリスクの低減につながっていることを示しているものと考えられる。

図表16 経済リスクと貯蓄行動



(3) 生活リスクへの対応と金融ニーズ

①金融・消費態度と生活リスク

金融・消費に関する態度と生活リスクとの関係を図表17に示す。

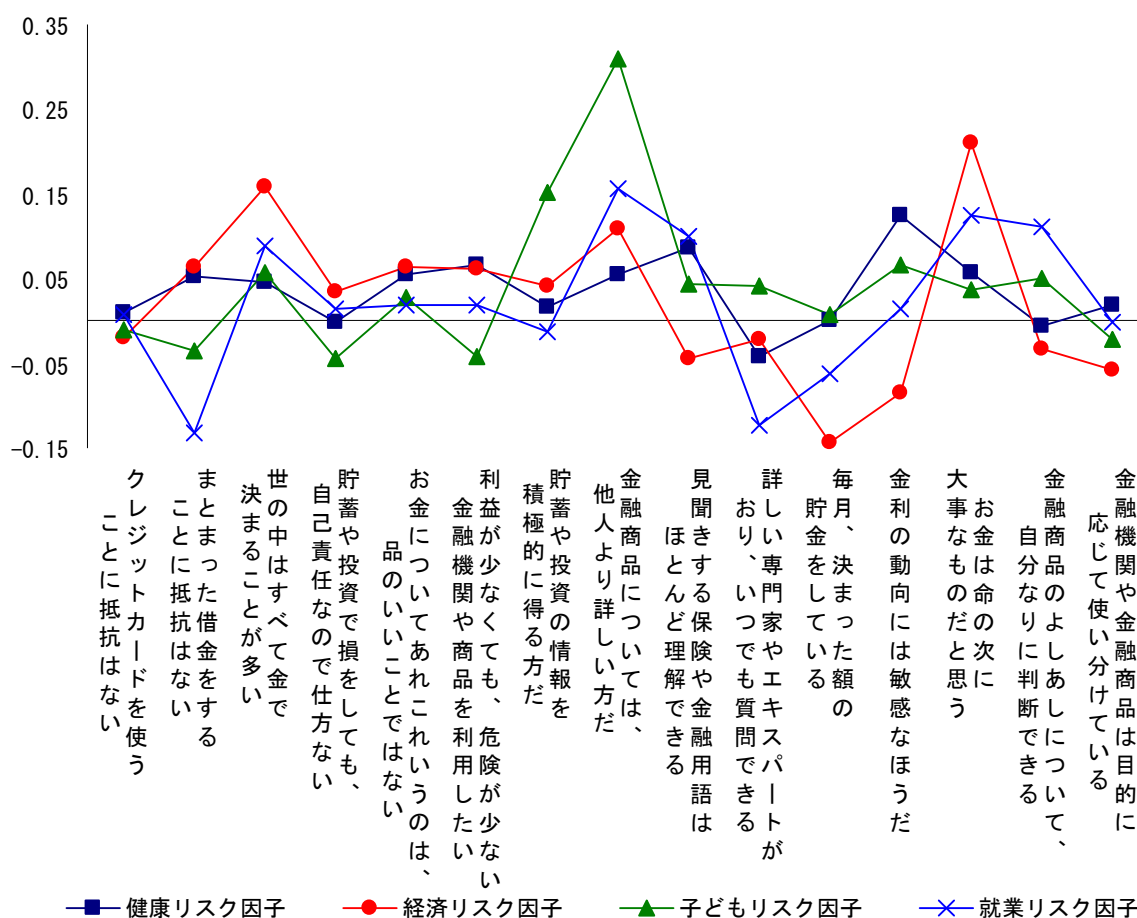
健康リスクについてみると、「金利の動向には敏感なほうだ」、「見聞きする保険や金融用語はほとんど理解できる」、「利益が少なくても、危険が少ない金融機関や商品を利用したい」で高くなっている。

経済リスクについてみると、「お金は命の次に大事なものだと思う」、「世の中はすべて金で決まることが多い」、「金融商品については、他人より詳しい方だ」で高くなっている。

子どもリスクについてみると、「金融商品については、他人より詳しい方だ」、「貯蓄や投資の情報を積極的に得る方だ」、「金利の動向には敏感なほうだ」で高くなっている。

就業リスクについてみると、「金融商品については、他人より詳しい方だ」、「お金は命の次に大事なものだと思う」、「金融商品のよしあしについて、自分なりに判断できる」で高くなっている。

図表17 金融・消費意識と生活リスク



また、金融・消費態度にかかわる内容 15 項目についてライフコース別にみると、「継続就業（既婚子あり）」は、15 項目の中でも金融に関する 7 項目で全体に比べ高く、特徴的である（図表 18）。

個々の項目に着目すると、「貯蓄や投資で損をしても自己責任なので仕方ないと思う」は、既婚子なしの継続就業層、出産契機で離職した層で高くなっている。また、「クレジットカードを使うことに抵抗はない」は子なしの継続就業層で、「利益が少なくても、危険が少ない金融機関や金融商品を利用したい」は、子育て中に離職した層や結婚・出産を契機に退職後復職した層で、それぞれ高い。

図表 18 金融・消費態度（ライフコース別）

	貯蓄や投資で損をしても、自己責任なので仕方ないと思う	クレジットカードを使うことに抵抗はない	利益が少なくても、危険が少ない金融機関や金融商品を利用したい	世の中はすべて金で決まることが多い	毎月、決まった額の貯蓄をしている	お金についてあれこれいうのは、品のいいことではないと思う	金融機関や金融商品は目的に応じて使い分けられている	お金は命の次に大事なものだと思う
全体 (n=1063)	75.1	65.5	60.5	51.6	43.7	41.3	27.5	23.6
継続就業（未婚子なし）(n=256)	78.1	73.0	57.8	60.9	41.8	39.8	24.2	27.7
継続就業（既婚子なし）(n=113)	80.5	71.7	59.3	52.2	47.8	37.2	31.9	22.1
継続就業（既婚子あり）(n=93)	59.1	66.7	60.2	43.0	48.4	37.6	33.3	22.6
結婚契機で離職(n=205)	69.3	61.5	59.0	50.7	49.8	42.4	26.8	20.0
出産契機で離職(n=154)	83.1	64.9	61.7	51.3	40.3	48.1	29.9	22.7
子育て中に離職(n=29)	75.9	51.7	65.5	44.8	37.9	55.2	34.5	34.5
結婚契機で退職後復職(n=41)	78.0	61.0	68.3	41.5	43.9	39.0	29.3	26.8
出産契機で退職後復職(n=54)	74.1	55.6	68.5	44.4	29.6	31.5	35.2	14.8
子育て中に退職後復職(n=35)	74.3	60.0	57.1	45.7	57.1	25.7	17.1	22.9
就業経験なし(n=25)	72.0	36.0	56.0	56.0	20.0	60.0	8.0	28.0
その他(n=58)	75.9	69.0	65.5	46.6	41.4	44.8	22.4	24.1

	貯蓄や投資の情報を積極的に得る方だ	金利の動向には敏感なほうだ	金融商品のよしあしについて、自分なりに判断できる	詳しい専門家やエキスパートがおり、いつでも質問できる	見聞きする保険や金融用語はほとんど理解できる	まとまった借金をすることに抵抗はない	金融商品については、他人より詳しい方だ
全体 (n=1063)	19.8	16.9	14.2	9.0	8.9	8.7	8.7
継続就業（未婚子なし）(n=256)	19.1	16.8	16.0	8.6	8.6	8.6	8.2
継続就業（既婚子なし）(n=113)	21.2	20.4	18.6	7.1	11.5	11.5	8.8
継続就業（既婚子あり）(n=93)	24.7	24.7	19.4	14.0	18.3	14.0	16.1
結婚契機で離職(n=205)	15.1	9.8	12.2	6.8	6.3	5.4	5.9
出産契機で離職(n=154)	21.4	16.9	11.0	11.7	7.1	9.1	6.5
子育て中に離職(n=29)	20.7	17.2	10.3	3.4	3.4	10.3	13.8
結婚契機で退職後復職(n=41)	26.8	24.4	12.2	12.2	12.2	7.3	14.6
出産契機で退職後復職(n=54)	22.2	16.7	16.7	7.4	9.3	9.3	7.4
子育て中に退職後復職(n=35)	28.6	20.0	8.6	8.6	8.6	8.6	14.3
就業経験なし(n=25)	8.0	12.0	0.0	4.0	0.0	16.0	0.0
その他(n=58)	17.2	19.0	15.5	12.1	8.6	1.7	8.6

③ライフコースと生活設計準備における金融行動

生活設計準備における貯蓄・投資といった金融行動について、自由記述で尋ねた結果をライフコース別にみると、それぞれ以下ようになる。

「継続就業（未婚子なし）」では、結婚・住宅取得等のため月々定額で貯蓄したり、リスク商品について勉強するなどの行動がみられた。主要な発言は以下のようなものであった。

- ・ 近いうちに結婚を考えているので、貯金は毎月一定額している。できるだけ使わないようにして、余るようにしている。
- ・ 結婚・住宅取得に向けての貯金
- ・ FX を勉強中
- ・ 預貯金はなるべく増やしながら保持することで、将来ほしいもの（マンション等）に備えている。
- ・ 老後の費用に積立貯金を始めた。

「継続就業（既婚子なし）」では、住宅取得に加えて出産・育児や老後を視野に入れた貯蓄を始めたり、FPを利用するなどの行動がみられた。主要な発言は以下のようなものであった。

- ・ ファイナンシャルプランナーを入れて生活設計をしている。保険を利用した資金計画や財形をしている
- ・ とりあえず貯金をしている／毎月可能な範囲で貯金している
- ・ 積立貯金をする／定額貯金をしている
- ・ 転勤族で持ち家が持たないので、将来地元に戻った時に、暮らせる家を買うための貯蓄。出産、育児に必要な貯蓄。
- ・ 老後（仕事をリタイアしたとき）の生活のための資金の準備

「継続就業（既婚子あり）」では、住宅取得や教育費、老後、自立を視野に入れた貯蓄などの行動がみられた。主要な発言は以下のようなものであった。

- ・ 月々の貯金／毎月決まった額の貯蓄。保険の見直し。
- ・ 子どもが巣立ち、熟年離婚となっても暮らしていけるように、お金をためている。
- ・ 家族に頼らず、自分の貯蓄や年金で生活して行きたいので、積立貯金しています。
- ・ 現在賃貸住宅なので家を建てるために貯金している。
- ・ 老後は不安なので個人年金に入っています

「結婚契機で離職」では、住宅取得や教育費といった明確な目的に向けて貯蓄する層と具体的な目的はなくとりあえず貯蓄するなどの行動がみられた。主要な発言は以下のようなものであった。

- ・ 株式についてみています。
- ・ とりあえず、毎月貯蓄をしている。
- ・ 家購入に向けて貯蓄
- ・ まずは子供の大学の費用をコツコツ準備中です

- ・ 小額ではあるが、貯金をする／年収の二割を毎年貯金する。

「出産契機で離職」では、住宅取得や教育費といった明確な目的に向けた貯蓄や保険を活用する行動がみられた。主要な発言は以下のようなものであった。

- ・ わずかな貯蓄／毎月こつこつ貯金
- ・ 適度な投資。
- ・ 毎月出来る限り貯蓄する／余裕のある時に貯金する
- ・ 住宅展示場へ出向き、資金繰りの方法や借入の方法などを聞き込んでいます。
- ・ 子供の学資保険の積み立て、両親の介護の為の貯金、住宅ローン繰り上げ返済の為の貯金

「子育て中に離職」では、教育費や老後を視野に入れた貯蓄、収支を管理しようとする行動がみられた。主要な発言は以下のようなものであった。

- ・ 貯蓄
- ・ 月々の生活費をきっちり家計簿につけて管理し、子供がある程度自立してきたら、パート収入を得るように計画している
- ・ 保険の見直し、個人年金の検討
- ・ 子供の学資保険

「結婚・出産・子育てで退職後復職」では、住宅取得や教育費といった明確な目的に向けた貯蓄を行う中で、個人年金や保険を利用するなどの行動がみられた。主要な発言は以下のようなものであった。

- ・ 時々貯金する／毎月の貯蓄
- ・ 貯蓄と土地探し
- ・ 生保の年金保険に入っている
- ・ 学資保険で教育資金をためている
- ・ 住宅ローンを完済して、学費にシフトすること。勉強中

「就業経験なし」では、住宅取得や教育費といった明確な目的に向けた貯蓄のほか老後・離婚等を視野に入れた貯蓄として個人年金や保険を利用するなどの行動がみられた。主要な発言は以下のようなものであった。

- ・ 貯金
- ・ 貯金をしたり、年金型保険に入ったりしている

このように、実際に行っている金融行動には定期的な貯蓄であったり、株式やFXなどのリスク商品や保険の活用などが共通してあげられているものの、その目的はライフコースにより様々である。また、同じようなライフコースであっても、明確な目的を定めて貯蓄している者と、予備的な動機に基づく者とが混在しているケースも散見されている。

女性をターゲットとしてマーケティング戦略を検討する場合には、従来活用してきた年齢やライフスタイル等のマーケティング変数だけではなく、ライフコースや生活目標などもあわせて考える必要があるだろう。

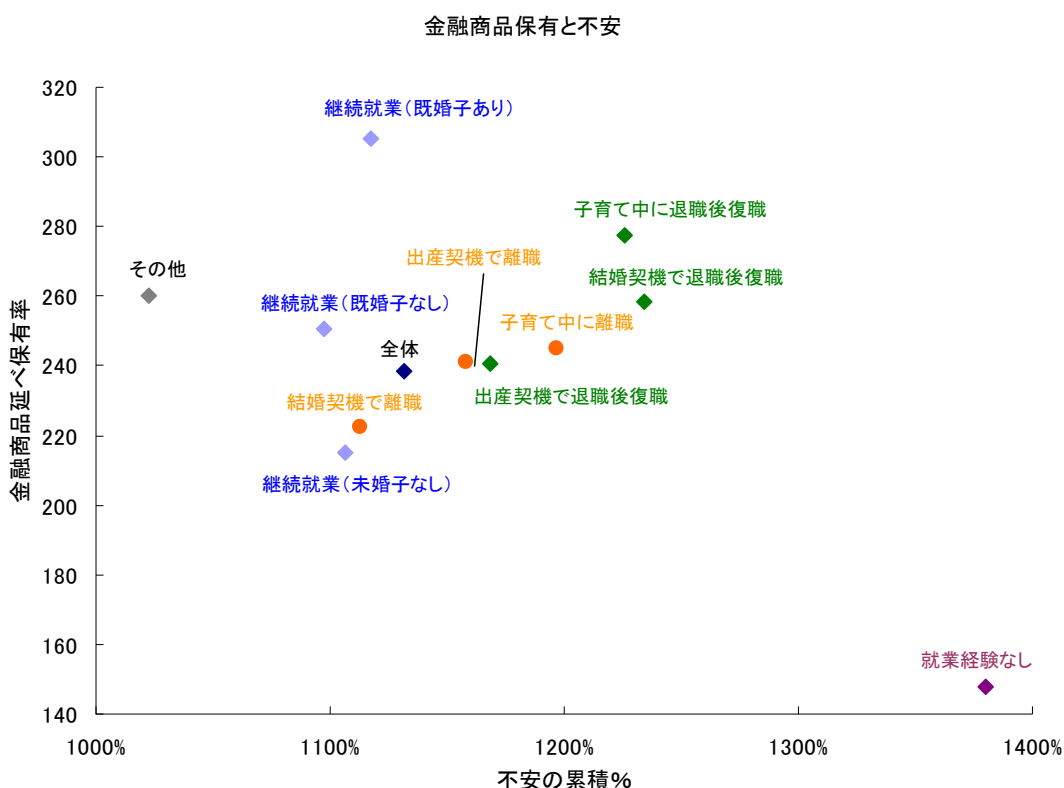
次節では、ライフコース別の金融マーケティングの可能性について検討していく。

2. 5 ライフコース別金融マーケティングの可能性

各々のライフコースについて不安の程度と金融商品の保有状況についてみると、総じて、復職層ほど不安感が高く、離職層、継続就業層の順で続いている（図表19）。離職層と復職層それぞれの離職の契機が同じ層に着目してみると、結婚および子育て中に離職した層は、復職すると、不安感の高まり同時に金融商品の保有率が上がっている。不安への対処としてまずは就業により所得を得て、金融商品を保有する様になっているものと考えられる。換言すれば、離職層および復職層については、金融商品へのニーズを高める手段として不安感の訴求の有効性が示されているとも考えられよう。

一方で、継続就業層では、不安の程度は全体に低いまま、結婚や出産といったライフイベントを経験するとともに金融商品の保有率があがっていることから、この層については、離職層や復職層と同様の手法では効果を見込むことは難しいだろう。しかし、離職層、復職層に比べて個人年収も世帯年収も高いことを含めて考えると、貯蓄余力は大きい。消費意欲の高い未婚層や既婚で子どものない継続就業層には計画的貯蓄の手ほどき、貯蓄意欲があり金融に関心がある子どもがいる継続就業層には資産運用方法など、関心に沿ったコミュニケーションが有効であると考えられる。

図表19 ライフコース別の不安と金融商品の保有率



また、ライフコースごとのリスクを視野に入れたマーケティングを考えると、金融商品で対応しうるリスクは経済リスクと健康リスク、子どもリスクといえるが、子どもリスクへの金融商品による対応は「教育費負担」が全てであり、子どもを持つ層はすでにリスクを認知しているため、まだリスクを感じていない、子なし段階のライフコースの人に対して、「気づき」を与えるという意味で貯蓄を勧めることが有効かもしれない。

一方で、健康リスクについては、貯蓄で対処しようと思うと、経済リスクや子どもリスク（教育費負担）への対処と使途が競合することになるので、必要に応じて「保険」を活用する必要があるといえよう。

経済リスクについては、教育費や医療、住宅ローン、所得など個々に要因が絡み合っているため、一概には言えない。ライフコースと個々の家計の状況によって、金融商品としては貯蓄や保険、リスク商品の活用を勧めるなどがあるだろう。図表20にライフコースの類型ごとの金融マーケティングに活用しうる特徴をまとめる。このような情報を基礎として、フィナンシャルプランナーなどが、金融に関するライフコース・マーケティングを実践することが望まれる。

図表 20 金融マーケティングに関係するライフコースの特徴

	経済状況		生活リスク因子			リスク内容	対処			金融		
	個人年 収 300万 円以上	世帯年 収 700万 円以上	健康 リス ク	経済 リス ク	子 ど も リス ク		就業 リス ク	生活設計の領域	学歴と資格	ネットワーク	保有種類	意識
継続就業 (未婚子なし)	36.7%	21.1%	-	-	-	+	案件の合う就職・転職先 頼れる人がいなくなる 失業 子どもを持ってない	家族との生活	高学歴 専門的高等教育 が必要な資格や 語学		預貯金	消費派 クレジット カード抵抗 なし
継続就業 (未婚子なし)	35.4%	30.1%		-	-	+	子どもを持ってない	仕事やその能力 家族との生活	高学歴 専門的高等教育 が必要な資格や	異性の協力者が いる	預貯金 保険・年金	クレジット カード抵抗 なし
継続就業 (既婚子あり)	31.2%	36.9%			+	-	教育費の負担 失業 ローン返済負担	仕事やその能力 家族との生活 趣味、健康、生 きがい		友達・仲間が多 い	預貯金 リスク商品 保険・年金	貯蓄派 金融知識あ り
結婚契機で 離職	3.9%	25.8%	+		+	-	教育費の負担	家族との生活			預貯金	
出産契機で 離職	3.9%	13.7%		+	+	-	教育費の負担 家族を遺して死亡 ローン返済負担	家族との生活 趣味、健康、生 きがい			預貯金	
子育て中に 離職	3.4%	18.5%	+	+	-	-	日常生活費の不足 生活習慣病の罹患 病気・ケガなどによる障害 長期の入院を要する病気 十分な医療・介護が受けられない 教育費の負担 家族を遺して死亡 ローン返済負担 投資の失敗	仕事やその能力 家族との生活 友人等とのつき あい 趣味、健康、生 きがい				安全志向
結婚契機で 退職後復職	7.3%	16.2%	+	+		-	所得の減少・伸び悩み 日常生活費の不足 病気・ケガなどによる障害 長期の入院を要する病気 十分な医療・介護が受けられない 教育費の負担 メンタル系の疾患 家族を遺して死亡 家族との関係悪化 ローン返済負担	仕事やその能力 家族との生活	低学歴	人に頼られる	預貯金 保険・年金	安全志向
出産契機で 退職後復職	5.6%	14.0%	-	+			所得の減少・伸び悩み 日常生活費の不足 教育費の負担	仕事やその能力 家族との生活 趣味、健康、生 きがい	低学歴 介護系	友達・仲間が多 い	預貯金	安全志向
子育て中に 退職後復職	14.3%	26.7%		+	+	-	病気・ケガなどによる障害 十分な医療・介護が受けられない 教育費の負担 家族を遺して死亡 失業 家族との関係悪化 ローン返済負担 子育てがうまくいかない	家族との生活 趣味、健康、生 きがい	低学歴 介護系		預貯金 リスク商品	
就業経験な し	0.0%	15.0%	+	+	+		日常生活費の不足 生活習慣病の罹患 老後生活費の不足 病気・ケガなどによる障害 長期の入院を要する病気 十分な医療・介護が受けられない 教育費の負担 メンタル系の疾患 家族を遺して死亡 住宅 頼れる人がいなくなる 家族との関係悪化 ローン返済負担 子育てがうまくいかない 投資の失敗	家族との生活				

3 考察とまとめ

ライフコースの特徴からは、継続就業層と復職層で就業目的に差があることがうかがえた。また、ライフコースと生活リスクの関係は、就業継続層では就業リスク、離職層、復職層では経済リスクをそれぞれ高く認知され、子どもあり層では子どもリスクも高いことがわかった。

ライフコースに応じた生活リスクを軽減する手段として生活設計をみると、未婚、DINKSではキャリアを見据えた自己投資や、将来の結婚・出産などのライフイベントに関する領域を中心に生活設計を検討している様子がうかがえた。また、子育て中に離職層では人間関係や趣味等の生きがいに関する領域についても生活設計を検討しているようである。

ライフコース別生活リスクへの対応としての金融行動は、就業継続層では就業リスクへの備えとしてキャリア形成のための自己投資と結婚や住宅取得、老後といったライフイベントに向けた資産形成、離職層では、経済的リスクへの対処として支出の圧縮による貯蓄の積み増し、復職層では、経済的リスクへの対処として所得の増加による貯蓄の積み増しなどを行っていることが明らかになった。

ライフコース別の金融リテラシーは、就業継続層は全般に積極性、判断力とも高く、出産・子育て離職層や復職層は積極性が高いものの判断力が低く、金融取引を巡るトラブルが生じる危険性が考えられる。

金融資産の保有は、総じて不安が高いほど金融商品も分散させる傾向がうかがえ、ただし、就業継続層では、不安の程度ではなく結婚や出産などによるライフステージの上昇に伴い資産形成も進むことで保有商品種類の多様化が進展する可能性もあるようだ。

資産保有の状況は、就業継続（既婚子あり）は金融資産、実物資産とも最も多様な資産構成であった。子育て中に退職後復職は、リスク性資産が多く、これは、資産形成に積極的ではあるが、判断力に乏しいため、トラブルが生じる危険性を孕むと考えられる。

今後、ライフコースを視野に入れた金融サービスの提供には、それぞれの経済力と金融リテラシーの双方からリスク性金融資産の許容度を考え、生活設計を含めた情報提供、コンサルティングが必要になるものと思われる。

【参考資料・文献】

- 山田昌弘「家族というリスク」2001年、勁草書房
- 栗林敦子「消費者の成熟化と金融行動」ニッセイ基礎研所報、2001年 Vol.17)
- 栗林敦子「個人のリスクマネジメントとしての金融・保険行動の現代的考察」2004年、生活経済学会第20回大会
- 栗林敦子・井上智紀「中高年生活者のリスク性金融商品利用に関する一考察—金融行動の成熟度と投資余力による類型化をもとに—」2006年、生活経済学会第22回大会
- 井上智紀「消費者の金融商品選択行動に対する新たな視座」ニッセイ基礎研 REPORT、2006年2月号
- 「国民生活白書（平成18年）」内閣府
- 「結婚と出産に関する全国調査（第11回出生動向基本調査）」国立社会保障・人口問題研究所
- 岩上真珠「ライフコーストジェンダーで読む家族（改訂版）」2007年、有斐閣
- 内閣府男女共同参画局「女性のライフプランニング支援に関する調査報告書」2007年
- 嶋崎尚子「ライフコースの社会学」2008年、学文社
- 青木幸弘、女性のライフコース研究会編「ライフコース・マーケティング—結婚、出産、仕事の選択をたどって女性消費の深層を読み解く」2008年、日本経済新聞出版社
- 栗林敦子「家計リスク認知とその対応」ニッセイ基礎研 REPORT、2008年6月号)
- 栗林敦子「ライフスタイルからみた生活リスク格差—リスク・リテラシーの視点から—」2008年、生活経済学会第24回大会